

# 生徒の援助要請意図を規定する全員面接の要因

—A 中学校におけるスクールカウンセラーの実践による検討—

○眞鍋一水<sup>1</sup>・日原尚吾<sup>2</sup>・井内田利広<sup>3</sup>

(<sup>1</sup> 広島県教育委員会事務局学びの変革推進部豊かな心と身体育成課スクールカウンセラー・<sup>2</sup> 広島大学大学院人間社会科学研究所・<sup>3</sup> 龍谷大学文学部)

## 問題と目的

スクールカウンセラー（以下、SC）に相談しやすい環境を整備するため、新入生を中心に全ての児童生徒と面談する「全員面接」が行われている。大学生に対する継時的調査では、援助要請意図が高いほどその後の援助要請行動が多かった（梅垣, 2017）。全員面接によって援助要請意図が高くなれば、SC への援助要請行動につながると想定される。しかし、全員面接のどのような要因が高い援助要請意図と結びつくのかは、明らかでない。

まず、先行研究を概観し、高い援助要請意図に結びつくと考えられる要因を検討する。全員面接の実践に関する報告（小野・後藤, 2015）からは、SC が関心をもって話を聞いてくれたと思えることが重要だと想定される。次に、青木ら（2014）や中岡・児玉・高田・黄,（2011）より、全員面接の意図を説明すること、および相談や話すことを強要しないことが適切だと考えられる。さらに、援助要請意図に関する先行研究（永井・新井, 2008）の結果から、SC を利用する利益が理解されることが重要と考えられる。最後に、木村・水野（2008）の研究から、SC の利用可能時間や場所など利用方法が理解されることが必要と思われる。

本研究の目的は、以上の要因を含んだ全員面接の事後アンケートを分析し、高い援助要請意図に結びつく全員面接の内容を検討することである。

## 方法

1) 協力者：A 中学校の生徒 118 名。3 年間かけて実施し、男女の割合は均等であった（各 59 名）。

2) 全員面接：実施時間は 1 年目は 30 分間、2・3 年目は 15 分間であった。全員面接は半構造化面接とし、以下の事柄を説明、質問した。

(1)SC の紹介：SC を利用できる曜日、予約方法を説明した。(2)意図の説明：悩み事があるときに SC に相談しやすいよう、事前に自己紹介の面談を行っていることを説明した。(3)SC を利用する利益の説明：心理学の知識や技術を用いて相談に応じていることを説明した。(4)相談の確認：現時点で困りごとや相談がないか確認し、希望に応じて助言した。(5)学校生活の様子等：学校生活の楽しい

ことや大変なことを尋ね、生徒の話題を傾聴した。

3) アンケート内容：年度ごとに、全ての全員面接が終了してからアンケートを一斉に実施した。分析には HAD 16（清水, 2016）を用いた。

(1)援助要請意図：相談行動尺度（永井・新井, 2005）を用いた。「心理社会的問題」（7 項目）と「学習進路的問題」（4 項目）について、SC に相談すると思う度合いを 5 件法で尋ねた。

(2)全員面接の要因：援助要請意図と関連すると想定した以下の各要因に関し、1 項目ずつ 5 件法で尋ねた。①SC による関心。②全員面接の意図理解。③全員面接における非侵害感。④SC を利用する利益の理解。⑤SC を利用する方法の理解。

## 結果と考察

心理社会および学習進路的問題を目的変数とし、性別、実施時間（15/30 分間）、全員面接からアンケート実施までの経過日数、各要因を説明変数として重回帰分析を行った。結果を表に示す。

表 援助要請意図を目的変数とした重回帰分析の結果

説明変数	心理社会 学習進路	
	β	β
性別（男子=1/女子=0）	.031	.182*
実施時間（15/30）	-.063	-.008
経過日数	.078	-.073
① SCによる関心：あなたが話したことをSCは関心を持って聞いてくれたと思いますか。	.221*	.129
② 全員面接の意図理解：全員面接のねらいが十分わかりましたか。	.034	-.012
③ 全員面接における非侵害感：（逆転項目）話したくないことを話したり、助言を受けることを強要されましたか。	.245*	-.029
④ 利用利益理解：みなさんの悩みや困りごとに対して、SCがどのようにサポートしているかが十分わかりましたか。	.245*	.228*
⑤ 利用方法理解：カウンセリングルームの場所、SCのこと、相談できる曜日、申し込み方法が十分わかりましたか。	-.008	.046

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

$R^2$  .304\*\* .166\*

生徒にとって、全員面接で SC が無理に話すことを求めず関心を示して話を聞いてくれ、相談により悩みの解消が期待できると思えた場合に、心理社会的問題に関する援助要請意図につながることが示唆された。学習進路的問題は、SC 利用の利益理解のみが規定した。悩みの内容ごとに異なる要因が影響することが示された。今回 1 要因を 1 項目で尋ねたが、複数項目を用いた確認が必要である。全員面接からアンケートまでの日数が長い ( $M=88.45$  日) ため回答の信頼性に限界がある。